桜・クラゲ

小林まもる

桜に埋もれた紫雲山千手観音堂は
桜の傘に覆われたクラゲの内臓のように
全山のちょうど臍の位置にあった

泡立つ４月の乱反射をさえぎり
ハマグリ色の空には
産卵する天蓋の
巨大クラゲが揺らいでいた

人々は観音さまのへその緒を
ひいては撓ませ
自慰の鉦を鳴らしては
桜の花に付きまとう
血潮の匂いを清めていた

錆びた記憶に響いたようだ
水の母よ
海の月よ
十億年のいのちの揺らぎよ

導師のお経より不遜な
言葉遣いをする自由
いま一人佇んでいる桜の下の標柱のように
ぼくの足はこの一瞬に深く痺れてくる